

“障害者の権利を守り発達を保障する”

みんなのねがいをつなげるための手づくりマガジン

“しがじん”は、全国障害者問題研究会（全障研）滋賀支部のマガジンです。障害のある人に関わる色々な人のつながりをつくり広げていきたいという願いから生まれました。

しがじん

TAKE
FREE
¥0

第8号



全障研ってなに？

キーワードは発達保障

全障研では、障害者や家族のねがいを大切にし、すべての人の発達を保障するために、いろいろな研究や調査を行っています。各地の取り組みを交流しつつ、一人ひとりが研究活動に主体的に参加しています。

出版活動

全障研出版部から月刊『みんなのねがい』と季刊『障害者問題研究』を発行しています。その他、保育や療育、教育、医療、福祉など幅広く書籍を出版しています。

支部やサークル

全国の都道府県に支部があり、それぞれの活動をしています。また会員相互に集まって、自由なサークル活動をしています。

みんなのねがいweb

ホームページでは、全障研のニュースとともに充実した資料とリンク集が。障害者政策や運動も適時アップされています。facebook もあります。

●今回の特集は「あそび・余暇」2～5p.

子どもにとっても大人にとっても「あそび」は大切。しかし、これが結構難しい。そこで考えてみました。

●2016年度全障研滋賀支部の活動を紹介8 p

●第50回全国大会（京都）8/6（土）～7（日）

●滋賀支部ホームページをリニューアル

<http://zenshoken-shiga.jimdo.com/>

全障研滋賀支部へのお問い合わせは

n_hanako@zeus.eonet.ne.jp(事務局長 能勢ゆかり)まで

特集



障害のある子どもの「あそび」



子どもたちは遊ぶことが大好き。おもしろい遊びや、自分の好きな遊びが大好きだし、お友だちや先生と一緒に遊ぶことも大好き。

遊びを通して、いろいろ考え、いろいろ発見し、いろいろチャレンジしようとしています。そうやって心や体をめいっぱい使いながら、物や人に関わろうとする力を豊かにしていきます。

遊びって目の前の活動だけじゃない意義があつて奥が深いですね。

学齢期のあそび

作って遊んでみよう その1

『癒やしのカンカン』



○ 用意する物 ○

- ・空き缶 同じのを2個
(できれば細めの缶がオススメ)
- ・ビニールテープ ・はさみ ・水

○ 作り方 ○

- ① 空き缶のプルトップを取る
- ② 空き缶の一つに水を入れる。量は多い方がオススメ
- ③ もう一つの空き缶を飲み口を下にし、上の缶と下の缶の飲み口をずらして、2つの缶をビニールテープでしっかり貼り付ける
- ④ できあがり



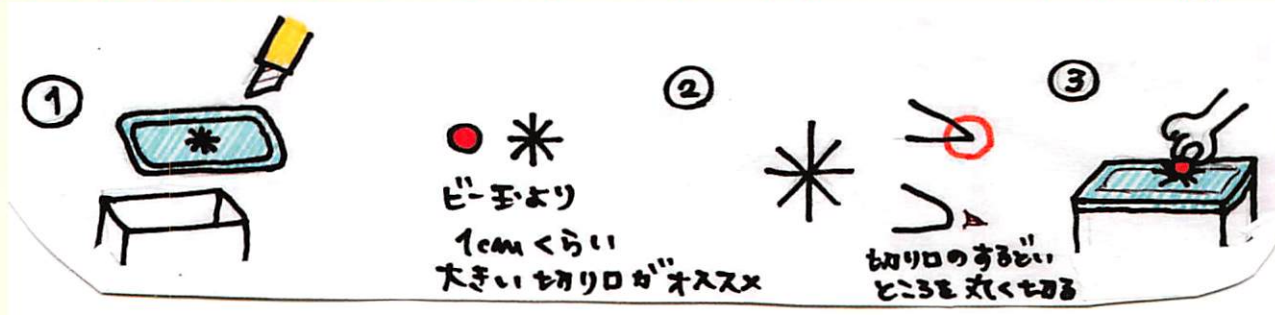
○ 遊び方 ○

上下を逆さにすると、缶の中の水が動きます。とてもこちよい音がしますよ。顔にソッとあててみるのもオススメ。水と缶のヒンヤリした感触、こちよい振動に気持ちがホッコリしますよ。大人にもオススメ。

○ 注意すること ○

ビニールテープで貼り付けていても、缶から水が漏れることがあります。濡れたら困る物のそばで遊ばないようにしてください。長期保存には向きません。毎回遊ぶ前に作り、遊び終わったら分解してください(^_^)v

作って遊んでみよう その2 『フット★イン』



○ 用意する物 ○

- ・タッパー 1個
(塩ビの蓋付き。深さのある物がオススメ)
- ・カッター ・はさみ ・ビー玉



○ 作り方 ○

- ①タッパーのふたにカッターで放射線状に切り込みを入れる。
切り込みの大きさは、ビー玉より1cmくらい大きいのがオススメ。
- ②切り口の鋭い部分をハサミで丸くする
- ③できあがり

○ 遊び方 ○

切り口からビー玉を入れて遊びます。ちょっぴりがんばって押し入れないと入らない大きさの切り口なので、入ったとき、気持ちいいし、うれしいですよ。塩ビのスポッと入る感触もなかなかですよ。(^_^)v

バージョンアップで、タッパーの底にカンカンのふたを置いておくと、カランカランといい音がしますよ。ビー玉の代わりに鈴を入れるのも楽しそう。



○ 注意すること ○

切り口がするどくなるので、子どもが遊ぶ前に大人が切り口に指を突っ込んでみて怪我をしないか確かめてください。

視覚障害のある子どもたちに

-視覚障害(全盲)幼児・児童・生徒の教材教具

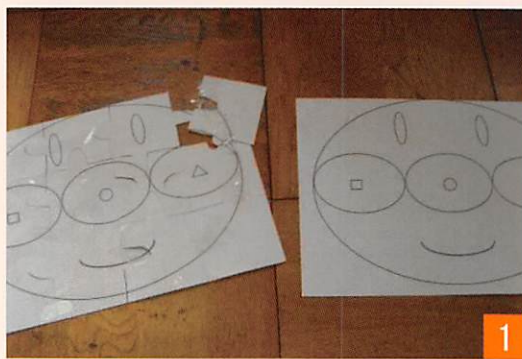
「立体パズル」

○ わらい ○

・基準を決めて図形を触り、全体の中から位置関係が分かる。たくさんの点図を触る。

○ 概要 ○

- ・児童の実態に合った図や絵を作成し、2枚
立体コピーをする。(児童が馴染みやすいように
最初はアンパンマンの絵・・・写真1)



表面が立体的になっているので、指で触ればなんの絵かわかります

「立体コピー」とは??

立体化したい原稿を専用複写機でカプセルペーパーにコピーし、専用現像機とおし熱を加えることで、トナーの付いた部分が膨張し画像が浮き上がるしくみ

- ・1枚の立体コピーを厚紙に貼り、8分割程度にカッターで切る。
(児童の様子に合わせて切り方や切る枚数を工夫する。)
- ・1枚は完成図、もう1枚はパズルのピースとして児童に渡す。

○ 使い方 ○

- ・完成図と切ったピースを同時に児童に渡し、完成図を参考にパズルを完成させる。
- ・絵は、児童の課題に合わせて随時変更し、期待感が持てるようにする。・・・写真2



○ 使ってみて ○

- ・たくさんの図形を楽しみながら触ることができ、形としてのイメージを膨らませることができた。
- ・簡単なパズルから少しずつ難易度をあげ、色々なパズルを経験することで、図形と空間関係の理解が深まった。
- ・図形をじっくり触る習慣がついてきた。

○ これからの課題 ○

・今後は、このパズルの理解をどのように数学の図形問題や社会のグラフ読み取り問題等につなげていくかが課題である。



青年・成人期の余暇



ドンマイクラブ

養護学校の卒業生が、月 1 回集まって音楽活動をしているのが「ドンマイクラブ」です。参加しているメンバーの年齢は、20 歳~39 歳と幅はありますが、ほとんどが学生時代に寄宿舎生活を経験し、一つ屋根の下で同じ釜の飯を食った仲間たちです。

卒業してからもつながりをもっていたいと始まった「ドンマイクラブ」。最近の発表の場としては主に年に 1 回作業所のまつりに出場するだけなのですが、毎月母校に集まって、大好きなバンドの練習やエイサーの練習をしています。そのときに仲間同士でたわいもない話をするのも楽しみで、練習が終わると「また来月会いましょう！」と元気に帰って行きます。参加者の一人が「ドンマイクラブ」への思いを語ってくれました。彼女は 10 年前に養護学校高等部を卒業しました。

「月1回、学校の寄宿舎で過ごした友だちと会えてリフレッシュできます。年齢の離れた先輩や後輩とも話ができて、楽しみです。ここに来ると仕事であった嫌なことも忘れることができ、また仕事に行ける。私にとってはなくてはならないものです。」

彼女だけでなく、みんな同じ思いをもっていると思います。卒業してからも同じ楽しみを共有できる仲間がいて、毎月集まって活動する場は大切にしていきたいです。(和田 昌子)

「和太鼓とんところ」

小学生から成人が参加しているサークル「和太鼓とんところ」を紹介します。

1995 年にハンディキャップのある子どものためのネットワーク委員会（大津市唐崎）が栗東市の和太鼓集団 TAO を招いて唐崎コンサートを開催したのがサークル誕生のきっかけでした。この演奏を聴いた親ごさんたちが中心になり、子どもたちにも太鼓を経験させてあげたいと立ち上げたのが和太鼓サークル「とんところ」です。21 年目を迎えた今では、小学生から成人まで約 30 名のメンバーが参加しています。各種イベントに参加したり、他府県の太鼓コンサートに出演したりして技を磨いています。

そのサークルの指導顧問が特別支援学校の校長を経験した河合弘之さん。河合さんは、昨年定年退職後、音が出せる広い場所を求めて、大津市黒津（田上）の大戸川沿いに今年 2 月、コミュニティカフェ「とことんハウス ミット・レーベン」と貸しホール「いちえホール」を開きました。このホールでは、和太鼓や小編成バンドなどの音楽コンサートや落語会、絵本の読み聞かせや講演会など、さまざまなイベントを企画・開催することができます。

河合さんは「とことんハウス」の代表オーナーを務めていますが、奥さんの早苗さんは「ミット・レーベン」の店主兼シェフでカフェを仕切っています。早苗さんも大津市の小学校で支援学級を担当し、長年特別支援教育にかかわってきました。夫妻は、障害の有無に関係なく、がんばる人を「とことん」応援したいと、夢と希望を語ってくれました。なお、「ミット・レーベン」の電話番号は、077-546-7571 です。(黒田恵美子)



2015年度連続講座

「4歳」の発達を学ぶ

発達の節目をゆたかに超えるために

2015年度の連続講座第3回を、3月13日にフェリエ南草津で行いました。テーマは、『「4歳」の発達を学ぶ』。参加者は42名でした。2015年度は、「発達のふし（質的転換期）」に焦点をあてようということで、「1歳半のふし」について、今回は、幼児期前半から幼児期後半への変り目である「4歳ころのふし」について学びました。社会就労センターこだまの栗本葉子さんから、レポート報告『Bさんの笑顔を取りもどすために』があり、松島明日香さん（滋賀大学）が、「4歳ころの発達」について、Bさんの姿もふまえて話してくれました。その後、参加者みんなで見聞交換をしました。

Bさんの笑顔を取り戻すために

40歳代半ばのBさんは知的障害のある男性です。「誰よりも明るい」と言われていたBさんなのに、作業所では、他の仲間と話をせず一人でもうろくしながら職員が話しかけてくるのを待っていることが増えました。長期欠席も増えました。「なんとかしなければ…」との思いをもった職員は、丁寧に彼の姿を捉え返します。不穏と緊張で気持ちが張り詰めていることも多いのですが、一方で作業所にくる実習生に生き生きと説明する姿もあり、彼が自分らしさを表現できる場づくり、出番づくりをしていこうと職員集団で考えていきます。

地域の青年がボランティアでストレッチ体操教室を開いてくれることになり、その教室の司会をBさんに依頼。教室も盛り上がり、他の仲間からも「司会、よかったよ」と感謝され、喜びと達成感ある笑顔がみられました。「みんなのなかで精いっぱい輝きたい！」「人の役に立ちたい！」という思いが人一倍強いBさん。自分流のメモをとって「打ち合わせをしよう」と仲間を誘ったり、反省もしたりしていた姿から、単にイベントがあればよいということではなく、悩みながらも、自分で工夫をし、その中で自分自身に手ごたえをもっていくことが必要なのだということを職員も学んでいきます。「オレ忙しいねん」と言いつつ、仲間を誘って次の企画を画策するBさんは、自信を取りもどしていったようです。

一方で、通院している病院とのケース会議で、1年ほど前から、毎日のように病院に電話をしていたことがわかりました。不穏が身体の不調として訴えられており、病院側はそれを丁寧に受け止めてくれていたのです。その電話も最近は減っているとのことでしたが、作業所内だけの支援ではなく、病院やご近所など、地域全体で支え合っているということを感じることができたのです。





「4歳ころのふし」って？

講師の松島先生は、オドオドする姿や長期休みなどのBさんの姿を単に「甘え」とか「体力・意欲の低下」と片付けるのではなく、「役立つ自分を感じたい、認められたい」という思いをもっているということに職員が気づき、その願いを実現できる実践をしようとしたこと、同時に、日中活動だけでなく、医療面や家族の問題などBさんの生活全般を総合的に支えながら、不安の軽減を図るということが、Bさんの願いの実現とともに進められたということに大切な意味があるとまとめられました。

そのうえで、「4歳頃の発達へのふし」とは、他者の心のうちに敏感になり、評価などを気にしてビクビクしたり、集団の中での自分の位置や役割にも敏感になるという特徴がみられやすいこと、「緊張したけど、頑張った」ことが仲間の中で認められると輝きをますが、一方でちょっとしたことですぐに自信をなくしてしまうという、大きく揺れる時期だということをお話されました。Bさんも毎日何度も落ち込みながら、「今日もテンションあげていこう！」と自分で自分を励まそうとします。この時期には自制心が形成されると言われるけれども、それは、外からの指示で「がまんする心が育つ」ということではなく、自分が自分を指図するという関係を作りあげていくことが大切なのでしょう。Bさんは、松島さんに会うと、困った表情で「私宴会係なんです、大変なんです」とよく訴えるのですが、そこには「そんな大変な仕事任されてんねんで、すごいやろ」という思いも隠れているようです。保育園の4歳児も、「がんばれ」よりも、「難しいやろー」とかの方が燃えたりします。「難しいなら無理しないで」ではなく、「難しいのに頑張っているあなたって素敵ね」がその人の自信につながっていくとお話されました。

自分自身への願いをもつこの時期、でも「うまくいかないなあ」「かっこよくなれへんなあ」と揺れる…その揺れる人たちを支えるには、揺れを許容できる自由度のある職場でなければなりません。Bさんの場合は、そうした職場であることとあわせて、病院の対応など、地域にもそうした支えがあったことが大切だったのでしょう。利用者も、職員も、家族も、みんなが願いをもち、願いをもつから揺れる…その揺れを否定するのではなく、互いに大事にしながらも力を合わせていけるような職場づくり、地域づくりをしていきたい、それが可能になるような施策や制度であってほしいと参加者

同士が確かめあうことのできた学習会でした。

(文責 白石恵理子)

感想文を紹介します

一人ひとりを多面的にとらえ、一人ひとりの思いや願いを考えていく、すてきな会だなあと思いました。本当は障害児・者だけでなく、誰にとっても、どんな年代の人にとってもこういうことって大切だと思うけど、やっぱり今の社会では“できるーできない”で評価しがちなところ、外的な基準枠に当てはめがちなのがあると思います。福祉関係、障害児・者、教育・福祉関係だけでなく、もっと対人援助職員にこの話を聞いてほしいと心から思いました。(20代 発達相談員)



レポート報告を聞いて普段関わる乳幼児の姿だけでなく、大人になってからの姿もイメージする機会となりました。色々な方面の方の意見が聞けてよかったです。

(30代 保育士)

2016年度滋賀支部の活動

1. 支部体制

- ・支部長：白石恵理子（滋賀大学）
- ・研究部長：黒田吉孝（びわこ学院大学）
- ・全国委員：松島 明日香（滋賀大学）
- ・事務局長：能勢ゆかり・事務局次長：森原 都（人間発達研究所）
- ・事務局：黒田恵美子、上神宗久（聾話学校）、浦嶋真由美（長浜養護）
別所尚子（大津市役所）、大師観世（野洲養護）
- ・協力員：加来加奈子（草津養護保護者）、松田佳代子（滋賀大学大学院生）
- ・会計：森原 都（人間発達研究所）



2. 2016年度連続講座

第1回学習講座

日時 9月4日(日)13:00~16:30

場所 彦根勤労福祉会館 研修室

テーマ「2, 3才の発達を学ぶ」〈就学前・学齢期〉

研究協力 白石 恵理子さん

これからの予定

第2回 2016年11月13日(日) 13:00~16:30 草津

講演「この国に生まれてよかった、この時代に生きてよかった」

講師 藤井克徳さん

第3回 2016年12月3日(土) 13:00~16:30 野洲

テーマ 「青年期の生と性」

第4回 2017年2月19日(日) 13:00~16:30 草津

テーマ 「保護者に学ぶ」

第5回 2017年3月4日(土) 13:00~16:30 大津

テーマ「5, 6歳の発達を学ぶ」〈学齢期・青年, 成人期〉

研究協力 松島 明日香さん

